

談話室

ある薙刀受講生の言

岸 純 子

「やっぱり好奇心が先行しましたネ。剣道とか柔道とかは、体験はしてなくても一応どんなものか知ってるワケですよ。薙刀となるとまず内容がわからないでしょ。長い棒みたいなものを使うってことは想像つきますけど剣道みたいに試合をするのか、基本技にはどんなものがあるのか……なんてネ。だから全然未知なるものへの興味は強かったですネ。」

「ただそれだけでない事も確かなんです。なんていうか、やっぱり武道でしょ、だからそこに何かあるんじゃないか、例えば礼儀とか、厳しさとか……、適当なシゴキもあるだろうし……。かといってあんまりメチャクチャなシゴキは困るんですネ、だけど入門だからそんなにひどくはないだろうと思って……。」

「先生の役割ですか？ そう、ガイド、親切なガイドであってほしい。そして少し雰囲気わかって来たら、一単位時をうまくプログラミングしてくれる人。そのプログラムにのっていけば半自主的な活動ができるような……、ここでは反復練習、ここでは新技術の習得っていうふうに。奥の方をチラチラのぞかせながら繰り返しかえしをしてくれたらグーなんですネ。」

「他のスポーツのばあいですか？ うーん、少し違いかもかもしれません。同じように未経験のものでも、あるていど馴れてくる

と遊べるんですよ、あそべるようになるとネその技術をよりウマくならうとか、もっと鍛練してやろうとかいう気持ちより、今自分のもっている体力とか器用性だけを以てその時間、如何に楽しく自分を存在させるかって気持ちになっちゃう。」

「だから先生は、ある程度の基本技術とルールを伝達してくれたら後はその一時間内をどうウォーミングアップし、どうグルーピングし、どういう組み合わせで試合をするか、その流れをスムーズにしてくれる存在であってほしいなんです。例えばラグビー、僕はラグビーやった事ないけどパスの仕方とかタックルとかあるでしょう。そういったもののやり方を覚えたら、ウマくなくても遊べるんですネ。ゲームができるっていう意味ですよ。そりゃ集団技術や個人技術がウマくなれば試合そのものももっと面白くなるに違いないんですがそこまで求めないんですネ。たいてい先生はまず準備運動やって、柔軟かなんかやる。そしてその時間が何回目かというのによって集団技術のぬき出しみたいのや、個人技術のヴァリエーションをグループでやらせて、最後に1~2回試合をさせてくれる。それはそれでいいんです。その時やる技術練習は、よりゲームを面白くする為の研鑽とか、自分のグループをより強くするためでなく、それ自体が一つの遊びになるんで

す。だからあんまりムズカしいのでなく、その一時間のうち何十分か練習したらそれらしいカッコウになるものが提供されると楽しくなりますネ。だってそうでしょう、こういう授業で編成するチームはクラブのような強い結びつきはありません。次の時間には別の人と組む可能性が十分にあるんです。そういった一時的チームでされる技術練習、特に集団技術はあんまり試合はこびと結びつかないんじゃないですか？ だから今自分のもってるもので楽しんじゃおうってことになると思うんですが……。」

「別に僕は他のスポーツを否定して雑刀を選択したんじゃないんですヨ。さっきいったように先生のリードのって自分なりの遊びもまたそれなりの自己鍛練もできるし……。」

半自主的ってさっきいきましたネ。適当なことばじゃない……。半抑制的っていうのかな？ 自分もウマくなりたいし、ウマクなることを期待した行動を先生に望むんです武道では。僕はですよ。だから手なお

していうんですか？ アレはビシビシやってほしいし。」

「え？ もう一度とるかでですか？ うーん次の段階の内容が提供されるのならやってみたいです。クラブみたいなのをやってまで一生懸命したいとは思わないけど、ある時間帯に場所と適当なリーダーがサービスされるなら少し続けてみたいような気がしますネ」

「礼儀作法？ 昔はそんなものヤリキレなかったけど今は求めています。年ですかネ」

以上は51年度前期保健体育実技雑刀を比較的情熱的に受講してくれた経済学部2年生の談である。皆が皆このような考え方をしているとは思えないが、一般の学生が「自身と体育」、「提供された体育の機会」をどうとらえているかあるていどころがわかる。雑談の中からぬきだしたこの「談」に筆者はあえて考察も私見も加えまい。このまま放り出すだけで稿を求められた責を免れたい。

基礎数学談義

深 石 博 夫

甲 「数学教室で、基礎数学シリーズ(A, B, C, D)の授業を始めてから5年になる。学生達にも基礎が出来た頃じゃないかね」

乙 「いや、そんなに甘いものじゃありませんよ。むしろ、1年生の段階で数学を真面目にやるかやらないかの決心をせまる踏み絵になっているのです」

丙 「それはよいことだよ。数学は自分で努力しなければわからないのだ——という

ことを教えるだけでもね」

乙 「現実に、本当に覚悟を決めて勉強している者は、何人いるのか。ほとんどの者は単位を取って卒業すればそれでいいのだ」

丙 「勉強しない者に単位を出すことはない」

乙 「そうとばかりは言い切れない。もっと、僕らの教え方を反省してみる必要はないか。どんな難かしい事でも、一度びわ

かってしまえば、当り前に見えて来るものだ。わかるように手助けをしてやるのが教育ではないかね」

丙 「難かしい内容をかみくだいて与えてやるのが教育ではないだろう。学生が自分で考えていけるように、考える態度を教えるのだ」

乙 「それが問題なんだ。数学の考え方

などというものは、人から教らされて『はい、そうですか』とわかるものじゃない。学生も自分の頭を働かせ、手を動かして、体で納得しなければいかん」

丙 「独学では無駄が多いから、能率的な進み方を教えてやるのが教師の仕事だ」

乙 「それが教えられる者に通じればよいわけだが……」 (1977.1月)

なんで外国語やるの

51年度後期フランス語のテキストに、内藤ソランジュさんの『外国語学習における成功と失敗の原因』という論文を使わせてもらっています。著者の言う「学習者」は私たち日本人が対象で、いちいち日本人は、日本人とは断っているわけではありませんが、その中には到底私たち日本人の側からは正面切って論じることのできない観点がいくつもあります。例えば外国語と日本人という時に必ず指摘される *timidité* (臆病、はにかみ、内気、等)の問題があります。ソランジュさんもこの問題を取り上げて、失敗の原因の一つに数え上げます。著者によれば、内気な学生は緊張し、誤りを絶えず怖れているために、ほんの些細な失敗でもうべしゅんこになってしまいます。しばしば先生の目を見ることさえおぼろげとしてよくなしえれないのです。そのため説明の大部分を聞きもらし、自ら話すチャンスが免れてしまいます。教室で話さないというのは、とりわけ外国語学習では致命的なこと、従って内気な学生は外国語が話せないというわけです。

これと関連して著者は自己中心的な態度

守 矢 信 明

も失敗の原因に数え上げます。著者の言葉をなるべく忠実に訳してみますところです。「学生によっては、あまりに自分自身に意識が集中しているため、外から来るものを受け入れることができない。一種の柵を自己と外界の間に立ててしまっているので、学習内容が自分および自分の問題に関係ないとなると学習できなくなってしまふ。実際には外国語の学習には是非とも外界に心を開くことが必要であり、柔軟な心の態度が必要である。」

一読してお分りのように著者の論旨は実に単純で明快、言うならばあたりまえの、目新しくも何ともない指摘です。しかしながらこの諄々とした論旨を一本に要約してみますなら、*timidité*→潔癖→もろさ→目も見ない→聞こえてこない→話そうとしない→自己集中→自分と外界に柵、柔軟性なし→外国語学習不適格ということになって空おそろしくなります。私たち日本人の心の奥のひだ、最も柔かい部分がひとつひとつ引きはがされて、先祖伝来の美德が実は病巣の根源だということになりますから。なるほどお国柄のちがいということとは

ありましょう、私たちは沈黙の雄弁を尊びますし、フランスでは喋らないでいる人間を見ると頭が弱いんじゃないかと心配してくれるんだそうです。しかし問題は文化の相異ということではなく、外国語の学習であって、ソランジュさんは日本人を論じているわけではなく、なぜ外国語が何年かけてもものにならないかと真面目に究明されているわけです。その意味では、「外国語は心臓が強くないとねえ」（そう思うなら一日も早く図々しくなれるように努力すべきです）で片づけてチヨンの論法よりはるかに具体的で説得力があります。

正直な所、私たちだったら、目を見ないとか、内気とか緊張とかいう言葉は何かしら生々しくて、堂々と口にするのが恥かしいような気がしませんか。私たちの概念ではそれらは真面目さとか誠実さに通ずるものですから、それをいけないと言うとなると、じゃあ不真面目がいい、図々しいのがいいとなって、どうもギクシャクするのです。

思えば学生の頃、なぜ質問をしないんだ、顔を上げなさい、アメリカでは他の先生と一緒に学生と授業を聴講しずつけずけ質問したり応酬して活気がある、どうもみんなは欲がないと一口説されることしばしばでした。幼い頃は幼い頃で、奥歯を噛みしめる、手をうしろに組んで先生の話をよく聞きなさい、と水を打ったような静けさ、

忠実さをしつけられてきました。急には無理というものです。

習、性となっている以上急には無理です。それに語学ができないからといって社会的制裁を受けるわけではありません（ソランジュさんはここに日本人学習者の動機づけのむずかしさを見えています）。外国語の学習を効果的にし、教室に活気を得るという願いは、頭で分っていても肉体がなかなか理解してくれない難かしさがあります。目を見て話すことだって自我に悩む年頃では大変な難事業です。誤りを怖れて話せない内気さも、それはそれでいいじゃないかという優しい同類への思いやりみたいなものでカヴァされます。それが語学でははっきりマイナスであると知っていても、それが語学でははっきりマイナスであると感じていないふてぶてしさが私たちの裡にあるようです。こういう根本には、何故外国語を学習するかという問題以前に、なんで人と喋らなければいけないのか、無理して喋ることはないではないかというふてぶてしさがあるように思えてなりません。詮じ詰めれば、言葉を必要とするかどうかで、私たちの深層に潜む価値観は、必要なし、とつぶやいているようです。ですからマイナスだと言われても、マイナスだっていいじゃないかと思うてくるわけです。